『枕草子』の「かたはらいたし」の位置

土屋博映

一　はじめに

『枕草子』の美的理念語に関する研究は今までに数多くなされている。本稿筆者も、「をかし」をはじめとして、拙いものであるが、美的理念語について、いくつかの論文をまとめてきた。

その過程で、美を追求するだけで、はたして『枕草子』の本質にまで、真実迫れるものであろうかという疑問を抱くようになってきた。その疑問を、わずかではあるが、まとめてきた。それが、『枕草子』の「にくし」の価値、と、『枕草子』の「すさまじ」の位置、などと題して論文にまとめてきたのである。重複するが、ここにその論文（以下、前記論文と呼ぶ）での筆者の考えを引用しておくことにする。

美を表現する言葉というものは、醜を表現する言葉、もしくは概念があってはじめて、美を美とし、醜を醜として認めることができるわけであって、もしもこの世の中に「美」しか存在しないなら、「美」と表現する必然性もないということになろう。

つまり、『枕草子』の美的理念語を追究し、検討しようとするならば、醜を表現する言葉、嫌悪表現語（仮にこう名付けた）についても同様の過程を経なければならないと思うのである。（以上前記論文より）

実際、『枕草子』の「もの型章段」には美的理念語に対し、ほぼ対当の立場（数、量ともに）で、嫌悪表現語が、主題として提示されているのである。

更に前記論文に記したことであるが、嫌悪表現語が主題として提示されている「もの型章段」を、日本古典文学大系の本文の順序に従い並べ、その分量を行数で示してみたものを、ここに再再掲し、確認しておきたい。

すさまじきもの㊼　たゆまるるもの②　人にあなづらるるもの②
にくきもの㊸　にげなきもの⑬　おぼつかなきもの③　ねたきもの㉔　かたはらいたきもの⑨　あさましきもの⑩　くちをしきもの⑨

見ぐるしきもの⑩　いひにくきもの④　わびしげに見ゆるもの⑥　暑げなるもの③　はづかしきもの⑳　むとくなるもの⑮　はしたなきもの⑦　つれづれなるもの②　とり所なきもの⑧　名おそろしきもの⑥　むつかしげなるもの⑥　くるしげなるもの⑥　心もとなきもの㉖　たのもしげなきもの④　したり顔なるもの⑧　さわがしきもの⑥　ないがしろなるもの②　ことばなめげなるもの②　さかしきもの⑪　いみじうきたなきもの②　せめておそろしきもの③　うちとくまじきもの⑪　以上三十五の嫌悪表現語が主題として提示されているわけで、さらに分量が多いもの十段を整理し、並べると次のようになる。

1　すさまじきもの㊼
2　にくきもの㊸
3　心もとなきもの㉖
4　ねたきもの㉔
5　はづかしきもの⑳
6　むとくなるもの⑮
7　にげなきもの⑬
8　さかしきもの⑪
9　あさましきもの⑩
10　見ぐるしきもの⑩

（注）「5　はづかしきもの」と「7　さかしきもの」は、善の意味の場合もあり、注意を要する。

以上十段が、嫌悪表現語の段として、十行以上の分量をもつ。前記論文でも述べたことであるが、これらは作者がより興味をひかれた段であり、より嫌悪表現語として重要なものだと意識していた段ということができよう。

これらがどのように用いられているかを追求することが、『枕草子』の本質に迫る上で重要であることは言うまでもないことである。すでに、前記論文等で、「すさまじ」「にくし」「心もとなし」「ねたし」「はづかし」等について検討したわけであるが、本稿では、「もの型章段」の中ではかなりの分量をもつ「かたはらいたし」と、「はしたなし」を取り上げ、さらに「あさまし」を関連語として検討をしてみる。いずれも『枕草子』では十行程度の分量があり、検討に値する言葉である。

「かたはらいたし」の位置づけを中心に、「はしたなし」はそれとどうかかわるのか、さらには「かたはらいたきもの」と連続している段の「あさましきもの」にも意味上の関連を認め、「あさまし」についても検討の課題に加えてみたい。

二　意味

1、かたはらいたし

日本国語大辞典（以下、「大辞典」とよぶ）によると、「かたはらいたし」の持つ意味の大体は次のとおりである。

「傍らで見ていても心が痛む、の意

①そばで見ていてもつらく思う。見ていて気がもめる。はたから見ていてはらはらする。気の毒に思う。心苦しい。申しわけない。恐縮である。片腹痛い。
②そばで見ていて苦々しく思う。はたから見ていて滑稽に感じる。笑止である。見てはいられない。
③そばの人に対して、気がひける。人に笑われそうで恥ずかしい。きまりが悪い。体裁が悪い」

語源は「傍らで見ていても心が痛む」である。①は「そばで見ていて、自分がつらく思う」という他人を見ての自己の感情である。②は「そばで見ていて、相手を苦々しく思う」という対象への評価である。③は「そばで見られて、きまりが悪い」という、他人から見られての自己の感情である。

語源から考えると、①から②、さらに③が成立したのではないかと推測される。

2、はしたなし

1と同様に「はしたなし」の持つ意味の大体は次のとおりである。

「①どっちつかずで、中途はんぱなさま。しっくりしない。
②きまりが悪くていたたまれないようなさま。間が悪く、引っ込みがつかないさま。
③思いがけないことで、不都合なさま。困惑するさま。迷惑だ。
④慎みがなく見苦しいさま。無作法だ。浅はかだ。みっともない。
⑤そっけなく、つれないさま。無情だ。無愛想だ。
⑥物事の程度がはなはだしい。はげしい。したたかだ。大したものだ。」

語源としては、①の「どっちつかずで、中途はんぱなさま」があたるのだろう。②と③はそれをもとにした、感情である。②は自分自身に関し、「きまりが悪い」という感情で、③は他人の（自分以外の）行動に対し、「迷惑だ」という感情である。

④と⑤は評価である。④は「慎みがなく見苦しいさま」⑤は「そっけなく、つれないさま」について用いる。

⑥は「物事の程度がはなはだしい」という、程度の用法である。

3、あさまし

1、2と同様に、「あさまし」の持つ意味の大体は次のとおりである。

「意外なことに驚いたり、あきれたりする意が原義。よい場合にも悪い場合にも用いたが、現代語では悪い意味にだけ使う。
①意外である。驚くべきさまである。
②興ざめである。あまりのことにあきれかえる。
③（「あさましくなる」の形で用い、思いもかけないことになる。何とも言いようのないさまになるの意から）死ぬことをいう。
④（程度、状態が驚きあきれる程であるというところから）はなはだしい。ひどい。

⑤情けない。嘆かわしい。見苦しい。
⑥生活がみじめである。貧乏でいたましい。
⑦品性がいやしい。がつがつしている。さもしい。」

語源は「意外なことに驚いたり、あきれたりする意」である。①がその語源であり「意外で驚く」のである。②もそれに関連し「意外であきれる」のであり、そこから「興ざめ」の意味を同一にとっている。ただし、「興ざめ」と「あきれる」の意味は本質的に違いがあるわけで、この分類にはやや賛成しがたい。

③は慣用表現であり、「死ぬこと」を意味する。
④は「はなはだしい」という、程度の意味である。
⑤は「情けない。嘆かわしい」が感情であり、「見苦しい」が評価となっている。
⑥は「生活」についてで、「みじめ」「貧乏」の意である。
⑦は「欲深だ」という評価であり、これが現代で用いられる意味である。

4、意味のまとめ

以上三語の意味を比較すると「かたはらいたし」と「はしたなし」には非常に親近性というものが感じられる。それに対し「あさまし」は異なるイメージがあるのだが、三巻本の配列を信じるならば、「かたはらいたきもの」の直後の段に「あさましきもの」があるわけで、作者の語感としては近いものがあったから、そのように位置づけたものと考えるのは、不自然ではないだろうと思われる。

方向性としては「かたはらいたし」と「はしたなし」の共通点と相違点はどこにあるのか、それらに対し「あさまし」はどのような位置にあるのかを考えていくということになる。

三　かたはらいたきもの・はしたなきもの・あさましきもの

①　かたはらいたきもの　よくも音弾きとどめぬ琴を、よくも調べで、心のかぎり弾きたてたる。客人などにあひてものいふに、奥の方にうちとけごとなどいふを、えは制せで聞く心地。思ふ人のいたく酔ひて、おなじことしたる。聞きゐたりけるを知らで、人の上いひたる。それは、なにばかりの人ならねど、つかふ人などだにかたはらいたし。旅だちたる所にて、下衆どもざれゐたる。にくげなるちごを、おのが心地のかなしきままに、うつくしみ、かなしがり、これが声のままに、いひたることなど語りたる。才ある人の前にて、才なき人の、ものおぼえ声に人の名などいひたる。よしとも覚えぬ我が歌を、人に語りて、人のほめなどしたる由いふも、かたはらいたし（96段）。

「かたはらいたきもの」については、以下の項目があげられている。

1、よくも音弾きとどめぬ琴を、よくも調べで、心のかぎり弾きたてたる。

これは、うまくない琴を、思いの限り弾いているのである。他人のことなどおかまいなしで、自分勝手に弾いている。それを、そばで聞いていて、きまりが悪いのである。つまり、意味の②にあたる。

2、客人などにあひてものいふに、奥の方にうちとけごとなどいふを、えは制せで聞く心地。

これは、客人として話しているときに、家人が家の奥のほうで雑談をしているのである。中にはもちろん他人に聞かれたくない内容もあったろう。客人に聞かれて、非常に間の悪い思いをしている様子。意味の③にあたる。

3、思ふ人のいたく酔ひて、おなじことしたる。

これは「思ふ人」、つまり恋人が酔っ払って、同じことを言ったり、したりするのであろう。酔ってしつこくなった状態である。意味の①と②が考えられるが、恋人ならば①ということになる。

4、聞きゐたりけるを知らで、人の上いひたる。

これは、うっかり噂話をしたら、その人が聞いていたというのである、聞かれてまずいのであるから、意味の③である。

5、それは、なにばかりの人ならねど、つかふ人などだにかたはらいたし。

これは、4の、人の噂話をしたことに関連する。例えばたいしたことがない人で、使用人であったとしても聞かれてまずいというのである。意味の③である。

6、旅だちたる所にて、下衆どもざれゐたる。

これは、旅立ちの時、身分の低い者がふざけあっているのである。見ていて苦々しく思うのであろう、意味の②である。

7、にくげなるちごを、おのが心地のかなしきままに、うつくしみ、かなしがり、これが声のままに、いひたることなど語りたる。

これは、親が、他人から見てはにくたらしい子供を、他人のことなどかまわず、自分の気持ちにまかせてかわいがるということであり、またこの子供の声のままに話したことを自慢してくる。親馬鹿であり、見ていて苦々しく思うので、意味の②である。

8、才ある人の前にて、才なき人の、ものおぼえ声に人の名などいひたる。

これは、学識がある人の前で、学識のない人が、何かしったかぶりをして人の名前などを言っているのであろう。苦々しくてとても見ていられない状態と考えられる。意味の②である。

9、よしとも覚えぬ我が歌を、人に語りて、人のほめなどしたる由いふも、かたはらいたし。

これは、うまいとも思われない自分の歌を、人に話して、人がほめてくれたなどと自慢（それも本当とは思われない）して言うのであり、やはり苦々しくて見ていられない状態である。意味の②となる。

② はしたなきもの　こと人を呼ぶに、我ぞととてさし出でたる。物などとらするをりはいとど。おのづから人の上などうちいひそしり

たるに、をさなき子どもの聞きとりて、その人のあるにいひ出たる。

あはれなる事など、人のいひ出で、うち泣きなどするに、げにいとあはれなりなど聞きながら、なみだのつと出で来ぬ、いとはしたなし。泣き顔つくり、けしき異になせど、いとかひなし。めでたきことを見聞くには、まづただ出で来にぞ出でくる。（127段）

「はしたなきもの」については、以下の項目があがっている。

10、こと人を呼ぶに、我ぞとてさし出でたる。物などとらするをりはいとど。

これは、呼んだ人と違う人がやって来たこと。物などを与える場合はいっそうだというのである。呼んだ側がきまり悪いのも、もちろんあるが、これは相手のことについて言っているのであるから、意味の④と⑤の評価と考えられる。

11、おのづから人の上などうちいひそしりたるに、をさなき子どもの聞きとりて、その人のあるにいひ出でたる。

これは、人の悪口を言ったら、たまたまそれを聞いていた小さい子が告げ口をしたこと。今でもよくあることだが、やられたほうではたまらない。意味の③の他人の行動に対し、迷惑だ、にあたる。

12、あはれなる事など、人のいひ出で、うち泣きなどするに、げにいとあはれなりなど聞きながら、なみだのつと出で来ぬ、いとはしたなし。泣き顔つくり、けしき異になせど、いとかひなし。めでたきことを見聞くには、まづただ出で来にぞ出でくる。

これは、悲しいめにあった人が涙をながして話すのに、それを聞いても少しも涙が出なくて困ったという場合に使われている。意味の②の、自分自身に関し、きまりわるい、という感情である。

③　あさましきもの　刺櫛すりて磨く程に、ものにつきさへて折たる心地。車のうちかへりたる。さるおほのかなるものは、所せくやあらんと思ひしに、ただ夢の心地して、あさましうあへなし。

人のためにはづかしうあしきことを、つつみもなくいひゐたる。かならず来なんと思ふ人を、夜一夜起きあかし待ちて、暁がたにうち忘れ寝入りにけるに、烏のいとちかく「かか」と鳴くに、うち見上げたれば、昼になりける、いみじうあさまし。

見すまじき人に、外へ持ていく文見せたる。むげに知らず。見ぬことを、人のさしむかひて、あらがはすべくもあらずいひたる。物うちこぼしたる心地、いとあさまし。（97段）

「あさましきもの」については、以下の項目があがっている。

13、刺櫛すりて磨く程に、ものにつきさへて折りたる心地。

これは、せっかっく使っていた櫛をきれいにしようと磨いていたのに、その磨きあげて使おうとしていた櫛が折れてしまったのだから、驚きをとおりこして、情けない、のであり、意味の⑤にあたる。

14、車のうちかへりたる。さるおほのかなるものは、所せくやあらんと思ひしに、ただ夢の心地して、あさましうあへなし。

これは、牛車がひっくりかえったのである。現代でも車がひっくり返ることもあるから、当時もあったのであろう。しかし、大変な交通事故である。もちろん、意味の①の、驚きあきれた、にあたる。

15、人のためにはづかしうあしきことを、つつみもなくいひゐたる。

これは、人に対して恥ずかしくまずいことを、遠慮なく言っていること、つまり遠慮がないのであるから、意味の②にあたる。あまりのことにあきれかえるというふうに考えておこう。

16、かならず来なんと思ふ人を、夜一夜起きあかし待ちて、暁がたにうち忘れて寝入りにけるに、烏のいとちかく「かか」と鳴くに。うち見あげたれば、昼になりにける、いみじうあさまし。

これは、必ず来るといった人（恐らく恋人であろう）が、一晩中待ち明かしたのに、結局来なかったということが対象となっている。気がついたら、烏が鳴いて、昼間になっていたという始末。意味の⑤の、なさけない（もちろん驚きあきれた、をふまえて、であるが）にあたる。

17、見すまじき人に、外へ持ていく文見せたる。

これは、（絶対に）見せてはならない人に、他へ持っていく手紙を見せてしまったこと（もしかすると恋文かもしれない）。意味の②の、あまりのことにあきれかえる、にあたる。

18、むげに知らず、見ぬことを、人のさしむかひて、あらがはすべくもあらずいひたる。

これは、まったく自分の知らないことを（したがって自分としては何も言うことができない）、自分が反論できない状態で、他人がしゃべりまくること。意味の②の、興ざめにあたる。

19、物うちこぼしたる心地、いとあさまし。

これは、物をこぼしたのであって、あ、いけない、しまった、という気持ち。⑤の、なさけない、にあたる。

④まとめ

以上、「かたはらいたきもの」（96段）「はしたなきもの」（127段）「あさましきもの」（97段）の全用例について考察を加えた。それぞれが、マイナス的なものを対象とすることは明らかだが、次に、以上の例をふまえ、他の段の用例も含めて、検討を加えようと思う。

四　用例

ここでは、三語の用例を見ていくが、まず「かたはらいたし」の用例について、検討を加えることにする。これまでに検討した「かたはらいたきもの」の段との重複があるが、再掲し、確認していきたい。

20、「さらなり。かたかるべき事にもあらぬを、さもあらむ後には、えほめ奉らざらむが、くちをしきなり。上の御前などにても、役とあづかりてほめ聞ゆるに、いかでか。ただおぼせかし。かたはらいたく、心の鬼出来て、言ひにくくなり侍りなむ。」（130段故殿の御ために）

これは、作者が頭の中将斎信とやりとりをしている部分。彼の求めに対し、作者は二人が深い関係になったら、「かたはらいたく」なるだろう、というのである。つまり斎信に大して、きまりわるくなって、普通に話ができない、という、やんわりとした拒否なのである。意味の②にあたる。

21、聞きゐたりけるを知らで、人の上言ひたる。それは、なにばかりの人ならねど、使ふ人などだにかたはらいたし。（96段かたはらいたきもの）

これは、既出。意味の③であった。

22、よしとも覚えぬ我が歌を、人に語りて、人のほめなどしたる由言ふも、かたはらいたし。（96段かたはらいたきもの）

これも、既出。意味の②であった。

23、「人をとらへて立て侍らぬなり」とのたまふも、いと今めかしく、身のほどに合はず、かたはらいたし。（184段宮にはじめて参りたる頃）

これは、作者に対し、伊周が「自分をひきとめて立つことができない」という、冗談を言うのであるが、新参者の自分としては、身の程に合わない冗談で、きまりわるいというのである。意味の③にあたる。

24、「おほかたさし向かひてもなめきは、などかく言ふらむとかたはらいたし。」（262段文言葉なめき人こそ）

これは、向かい合って話している相手が失礼なのに対し、どうしてこんなことを言うのだろうと、あきれた気分で「かたはらいたし」と言っている。この点「あさまし」と通じるところがあると言うことができよう。そばで見ていて苦々しく思うので、意味の③にあたる。

25、いみじうかたはらいたきまで言聞かせて、「御名をば今は草の庵となむつけたる」とて、いそぎ立ち給ひたれば（82段頭の中将のすずろなる）

これは、作者が（返答しろと）詠まれた和歌に対し、見事に返答して、それがすばらしかったとやたらとほめられる場面。自分がきまりわるくなるまで、ほめられるのである。意味の③にあたる。

26、「いとほし。これに何取らせむ」と言ふを聞かせ給ひて、「いみじう、かたはらいたきわざは、せさせつるぞ。え聞かで、耳をふたぎてぞありつる。その衣一つ取らせて、とり遣りてよ」と仰せらるれば（87段職の御曹司に）

これは、中宮の言葉。中宮の女房たちがいやしい者に対し、下品な会話をしたことに対して用いる。そばで見ていて（聞いていて）我慢できないほど、気がもめるのである。意味の①にあたる。

27、かたはらいたきもの　よくもね弾きとどめぬ琴を、よくも調べで、心の限弾きたてたる。（96段かたはらいたきもの）

これは、既出。そばで聞いていて苦々しいのである。意味の③にあたる。

28、かやうの事こそは、かたはらいたきことのうちに入れつべけれ

ど、一つな落としそと言へば、いかがはせむ。（102段中納言参り給ひて）

これは、作者が中納言隆家とのやりとりで、見事一本とったという自慢話を『枕草子』に記すことに対して用いている。人に聞かれて（読まれて）きまりわるいのである。意味の③にあたる。

29、まさなき言もあやしき言も、大人なるはまのもなく言ひたるを、若き人はいみじうかたはらいたきことに聞入りたるこそ、さるべきことなれ。（195段ふと心劣りとかするものは）

これは、年長者の言うことを若者が、苦々しく思って聞いているのである。いつの世も同じである。年長者のしったかぶったか、またはえらそうな、お説教といったところか。意味の②にあたる。

「かたはらいたし」は、十例を見たのだが、①は一例、②は三例、③は六例であった。

①は、「そばで見ていて気がもめる」といった、他人への自分の感情である。

②は、「そばで見ていて苦々しく思う」といった、他人への評価である。

③は、「そばで見られてきまりが悪い」といった、自分に対する感情である。

結局、「かたはらいたし」は、「きまりが悪い」といった自分の感情として用いられることがもっとも多いことになり、他人への評価の倍、使われていることがわかった。

五　はしたなし

ここでは、「はしたなし」の用例について、見て行く。「はしたなきもの」で既に見たものもあるが、再掲して確認しておく。

30、などか、人添へては賜はせざりし。かれがはしたなくて、雪の山まで登りつたひけむこそ、いとかなしけれ。

これは、いやしい女が、見るからにきまりわるい格好で雪の山を登ったということに対して用いたものである。きまりわるい格好なのだから、意味の④である。

31、さることも聞えざりつるものを、よべのことにめでていきたりけるなり。あはれ。かれをはしたなう言ひけむこそ、いとほしけれ。（8段大進生昌が家に）

これは、作者が大進生昌のことを悪く言ったことに対して用いる。慎みがなく見苦しいということなので、意味の④にあたる。

32、それを、「まな」とも取隠さで、「さなせそ」「そこなふな」などばかり、うち笑みて言ふこそ、児もにくけれ。我はた、えはしたなうも言はで見るこそ心もとなけれ。（152段ひとばへするもの）

これは、勝手なことをする子どもに注意しない親と子を不快だと思うのだが、それに対して何とも言えない自分に対して用いている。つまり、きまりが悪くていたたまれないようなさまのことで（情けないという意味合いも含むであろう）、意味の②である。

33、あはれなる事など。人の言出で、うち泣きなどするに、げにい

とあはれなりなど聞きながら、涙のつと出来ぬ、いとはしたなし。（127段はしたなきもの）

これは、既出。悲しい話を聞きながら、涙が出てこないのである。つまり、意味の②である。

34、あまりはしたなき程になりぬれば、立出でて、わが起きつる所もかくやと思ひやらるるも、をかしかりぬべし。（36段七月ばかりいみじう暑ければ）

これは、夜が明け過ぎて、きまりわるい時分という意味である。意味の②にあたる。

35、はしたなきもの　異人を呼ぶに、我ぞとてさし出でたる。（127段はしたなきもの）

これは、既出。呼んだ人と違う人が勘違いして自分だと思ってやって来たのである。これは、立場が自分の場合と相手の場合とで異なるが、いずれにせよ、感情の②か③となるだろう。

「はしたなし」は、感情と評価が同等に用いられているようである。「かたはらいたし」と類似する面と、特に「あさまし」と重なるような例（32とか33など）もうかがわれる。

なお、「あさまし」については、「あさましきもの」の段からのみ考えるといずれも感情語として用いられているが、「情けない」という気持ちが強いようである。

五　おわりに

まず初めに、意味の基準にした、大辞典についてであるが、「かたはらいたし」が非常にシンプルな分類をしているのに対し、「はしたなし」と「あさまし」は、やや分類が複雑である。これは担当者の資質によるものだろうが、「はしたなし」と「あさまし」については、「かたはらいたし」の分類にならってシンプルにした方がよいように思われた。

例えば、次のようにしてみてはどうだろうか。

1、かたはらいたし

語源　「傍ら痛」し　そばで痛く感じる

①そばで見ていてきまりが悪い

②そばで見られてきまりが悪い

③そばで見ていて苦々しい

①は、他人の行動を見てきまりが悪い、という自己への感情である。

②は、自分の行動を見られてきまりが悪い、という自己への感情である。

③は、他人の行動を見ていて苦々しい、という他人への評価である。

2、はしたなし

語源　「端なし」（「端なり」に同じ）どっちつかずで中途半端だ

①きまりが悪くていたたまれない
②思いがけない事で迷惑だ
③つつしみがなくみっともない
④はなはだしい

①は、他人の行動を見ていたたまれない、という自己への感情である

②は、他人の行動を見て迷惑だ、という他人への感情である。

③は、他人の行動を見てみっともない、という他人への評価である。

④は、程度である。

3、あさまし

語源　意外なことに驚きあきれた

①情けない。嘆かわしい。
②興ざめだ。見苦しい。
③品質がいやしい。
④死ぬ（「あさましくなる」）の形で
⑤はなはだしい

①は、他人（自分）の行動を見て情けない、嘆かわしい、という自己への感情である。

②は、他人の行動を見て興ざめだ、見苦しいという他人への評価である。

③は他人の行動を見て、品性がいやしい、という他人への評価である。

④「死ぬと」いう意味の慣用表現である。

⑤程度である。

このようにして、考えてみると、「かたはらいたし」の特徴は「他人から見られて」というところにある。これは、「はしたなし」には存在しない。また、「かたはらいたし」は、他人の評価が「苦々しい」だが、「はしたなし」は「みっともない」である。この2語は、「きまりが悪い」と言う点で共通項をもち、非常に似通った意味をもつが、「あさまし」はやはり語源を始めとして、かなり異なっていると言えよう。近い意味は「情けない」という感情、「見苦しい」という評価である。

次に、実際の用例から言うと、「かたはらいたし」は、人の発言に深く関わっているようである。

「発言――側で耳にする――きまりが悪い」という図式が本来であろう。これに対し、「はしたなし」は、人の行動また状態に深く関わっているようである。

「行動・状態――目にする――みっともない」という図式が本来であろう。

用例を見ると、11の例のように、みっともない格好や、15の例のように、きまりわるい時分、などは、「かたはらいたし」では用いに

くい表現となっていることがわかる。

そうとう親近性を持つのだが、こういう点からして、やはり、語源の影響は大きいものということが確認できる。そこで、どちらも感情語の意味合いが含まれるが、「はしたなし」のほうが評価の例が多いということは、

発言（かたはらいたし）対、行動・状態（はしたなし）

という本来的な相違によるものなのだろう。

これら二語に対し、「あさまし」も、意外なことに驚きあきれる、という語源がやはり深く関わってくるのである。

もちろん、用例には、発言も、行動・状態もあるのだが、特徴的なのは、一の櫛が折れた例、二の車がひっくりかえった例、七の物をこぼした例、などである。これらはすべて物が対象であり、人ではない。この点が大きく他の二語と異なる。

「かたはらいたし」と「はしたなし」と「あさまし」を、大辞典の在り方と、実例から次のようなことが言えるようである。

① 辞書の項目は心しなくてはならない。たくさん項目を並べ立てればよいというのではない。しっかりとたてれば、項目は多くなくてもよいどころか、多くないほうがかえってよいことも少なからずあるということがわかると思う。

② 語源は大切である。言葉というものは、語源の力は大きく、その影響はいつまでも続くのだということが知られる。本稿で今回扱った三語ももまさに語源でほぼ決まりというようなところも多々見受けられた。

③ 「かたはらいたし」「はしたなし」「あさまし」三語は、それぞれ、きまりわるい、みっともない、情けない、などという用例で、かなり近い意味をもち、そこから『枕草子』でも「かたはらいたきもの」の直後に「あさましきもの」が置かれているのだろう。しかし、それらは、たまたまそういう近い意味を持つというだけのことであり、

発言を対象とする「かたはらいたし」

行動・状態を対象とする「はしたなし」

物事を対象とする「あさまし」

という区別が本質的に存在することがわかった。

④ 感情語か評価語という点を見れば、「はしたなし」がもっとも評価語的であり、次が「かたはらいたし」で、もっとも感情語的なのが「あさまし」ということになる。

（本学　教授）